

# マサチューセッツ工科大学における 日本語教員アシスタントプロジェクト実施報告

著者	尾沼 玄也
雑誌名	言語メディア教育研究センター年報
号	2018
ページ	97-106
発行年	2019-07-16
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1092/00001716/">http://id.nii.ac.jp/1092/00001716/</a>

# マサチューセッツ工科大学における 日本語教員アシスタントプロジェクト実施報告

尾沼玄也  
(神田外語大学)

## 1. はじめに

神田外語大学(以下、KUIS)言語メディア教育研究センター(以下、LMLRC)は、2019年1月にマサチューセッツ工科大学(以下、MIT)に学生1名を日本語講師アシスタントとして派遣した。本稿では、同研修の概要について報告する。

## 2. 背景

MITでは、学期中に開講される日本語クラスに加え、毎年1月の冬季休講中に短期間の集中日本語クラスも設置している。日本語初学者を対象としたこのクラスは、毎年20名から30名の履修者がいる。本研修では、この集中クラスの実施期間中にKUISから学生を派遣し、クラス外での練習活動をサポートした。

尚、今回の派遣は、研究活動などを通じて協力関係にあるLMLRCとMITの間で企画され、2018年度に試験的に実施された。そのため、KUISに設置されている日本語教員養成課程とは直接的な連携をしない形で運営された。このようなことから、本研修は、いわゆる日本語教育についての学習成果を実践する海外教育実習とはまた別の取り組みであることに注意する必要がある。

## 3. 研修概要

研修のスケジュールは、表1のとおりである。募集期間が短かったことや、アメリカまでの飛行機代などで参加費が高額であったことなどが原因で、参加した学生は1名(英語専攻4年。以下、KUIS生)であった。KUIS生の研修参加の主な動機は、KUISで学ぶ留

学生との交流を通じて国際交流と日本語教育に興味をもったこと、卒業後にアメリカでの生活を考えていることであった。

表 1

10月中旬	<ul style="list-style-type: none"> <li>・参加者募集</li> <li>・参加者決定</li> </ul>
11月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・事前研修 1 「日本語教育概説」</li> <li style="padding-left: 2em;">2 「教科書の構成、平仮名と片仮名」</li> <li style="padding-left: 2em;">3 「分析：L1 の文法」</li> <li style="padding-left: 2em;">4 「分析：L1 の練習」</li> </ul>
12月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・事前研修 5 「分析：L2 の文法・練習」</li> <li style="padding-left: 2em;">6 「分析：L3 の文法・練習」</li> <li style="padding-left: 2em;">7 「ドリル練習の方法、練習課題の作成」</li> <li style="padding-left: 2em;">8 「授業観察の方法」</li> </ul>
1月初旬	<ul style="list-style-type: none"> <li>・MIT での研修</li> <li>・研修振り返り</li> </ul>

研修に先立ち、1回90分の事前研修を8回実施した。KUIS生は日本語教員養成課程を履修していなかった。また英語教育に関する科目の受講歴もなかったが、時間的な制約もあり、MITの授業予定を参考に、使用される教材<sup>1</sup>の分析をすることや、クラス外指導の計画、実施の練習をすることを中心に扱った。尚、報告者はインドネシアに出向しているため、事前研修はKUISとインドネシアをビデオ会議システムで結んで実施した。

事前研修では、教科書で扱われる内容の分析を通して日本語の言語特性を解説した。また、練習をさせる際の指示の出し方、ティーチャートークなどの練習も実施した。教科書で扱われている練習を参考に、追加の練習課題を作成する課題も与えた。事前研修後半で

<sup>1</sup> The Japan Times(2011)「初級日本語げんき I 改訂版」を使用

は、時間外に日本語学習者を相手に指導練習をする課題を与えた。KUIS生が指導者役になり、教科書にある練習問題に取り組ませたり、KUIS生が自ら用意した追加の練習を行わせたりする課題に取り組ませた。KUIS生は日本語教育について学ぶのは初めてであったが、MITで指導に携わる可能性のある内容に限定して取り組ませることで、ある程度の成果を挙げることはできたと考える。

KUIS生にとって最も大きな課題だったのは、教科書に記されている英語の文法解説を十分に理解することであったように思われる。MIT側での授業は、基本的に媒介語を使わずに、日本語のみで進められるということだった。しかし、学習者はこの解説部を授業前に読み込んでいるだろうことから、教科書に書かれていることは全て十分に理解するよう求めた。補足資料として、日本語版の解説も使用したが、新しい内容を英語で学ぶことは負担が大きいようであった。

### 3. 実習

1月8日から、11日に実習が行われた。報告者は諸事情により同行できなかったが、KUIS生には毎日活動記録を提出させ、必要があればビデオ会議システムを使って相談に乗るようにした。研修では、毎日午前10時から午後1時の間に行われる授業を見学した。その後、昼食休憩を経て、3時半頃までヘルプデスクで待機し、質問を受け付けたり、希望者と一緒に練習を行ったりした。

授業では、8日・9日に第一課が、10日・11日には第二課がそれぞれ扱われた。見学の記録は、川口・横溝(2005)のフォーム<sup>2</sup>を利用した。同フォームは、新任・現任教員が利用することを前提に作成されていることもあり、「自分ならこうするんじゃないかと思ったところ」についてはKUIS生は記述するのが難しかったようで、「教師の発話」に1点、「教材の使い方」に1点記述があった

<sup>2</sup> 巻末資料1

のみだった。一方、「良かったところ」には、「教師の発話」に 11 点、「教師の行動」に 9 点、「教材の使い方」に 8 点、「教室活動の流れ・つながり」に 7 点の記述があった。日々の授業観察記録を通して多くの刺激を得た様子が伺えた。本人の中でどのような学びがあったのかは、次章で詳述する。

ヘルプデスクでは、4 日間を通して延べ 11 人の学習者の指導をした。活動記録<sup>3</sup>に記された一日ごとの対応人数と活動の概要は表 2 の通りである。

表 2

	対応人数	活動内容
1 月 8 日	8	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 時計の読み方の練習</li> <li>・ 質疑応答練習</li> <li>・ 即興的なやりとりの練習</li> <li>・ 聴解練習</li> <li>・ 語彙の学習</li> </ul>
9 日	1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 平仮名テストのための学習</li> </ul>
10 日	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ こそあど（指示詞）の使い分け練習</li> <li>・ 助詞「を」を使った文の練習</li> <li>・ 会話練習</li> </ul>
11 日	0	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ なし</li> </ul>

活動記録には「疑問・よく分からなかったところなど」という欄を設け、KUIS 生が困難さを感じた場合には、報告者が相談を受け付ける体制をとっていた。一点だけ、「さらに上のクラスレベルの質問をしてきたので、それに答えていいのか非常に迷った。」という記述があったので、対応したが、それ以外に報告者の助けが必要なほどの問題が起こることはなかった。但し、最終日にヘルプデス

<sup>3</sup> 巻末資料 3

クの利用者がなかったことは、KUIS 生にとって非常に残念なことであったと思われる。これについては、最終日の活動時間終了後にすぐに報告があった。今回は MIT の学生からの聞き取りができなかったため、理由について検討することができないが、ヘルプデスクの存在や、開設期間についての学生への周知に更に力を入れるなどの改善策も考えられる。

#### 4. 研修を通じた KUIS 生の学び

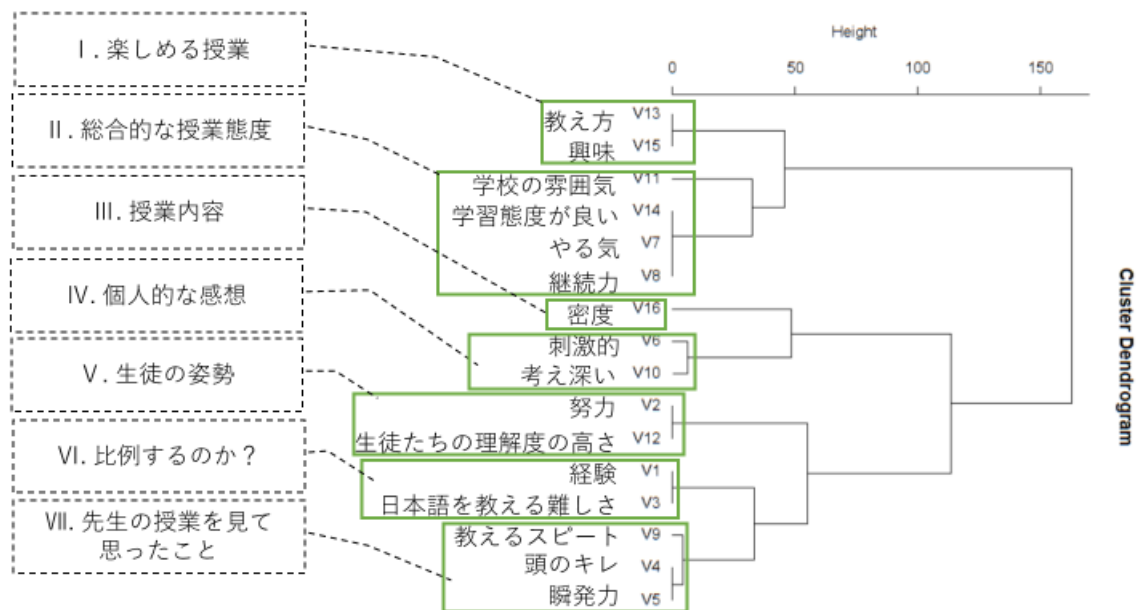
##### 4. 1 分析の方法

前述の通り、本研修は試験的に実施した企画であり、参加者も 1 名であった。研修の特殊性を考慮し、KUIS 生の学びについては、仮説生成的手法である PAC 分析（内藤 1993）を用いて考察する。この方法では、調査者が予め用意した枠組みを押し付けることなく、被調査者が自らの態度について考察する事ができる。

PAC 分析の手法に従い、はじめに、下記の連想刺激文を口頭、文章で示した。「MIT 日本語アシスタントの準備活動や実際の研修を通して、どのようなことを考えたり学んだりしましたか。浮かんでくるキーワードや、短い文を書いてください。」次に自由連想を記入させた。そのあと全ての項目間の類似度を 10 段階の評定尺度に基づき判断させ、非類似度行列を得た。ここまでの作業には、PAC 分析支援ソフト「PAC アシスト (ver. 20080324)」を利用した。

次に、統計分析ソフト R (ver. 3.5.2) を利用してクラスター分析を行い、デンドログラムを作成した。報告者がクラスターの分割案を提示したが、最終的な決定は KUIS 生自身が行った。得られたデンドログラムを表 3 に示す。

表 3



#### 4. 2 研修の学びについての KUIS 生の総合的解釈

KUIS 生はデンドログラムを7つのクラスターに分けた。クラスターそれぞれについて名前をつけさせたり、クラスター間の類似性や違いなどを考察させたりする過程を通して、KUIS 生の分析を引き出した。以下に、KUIS 生自身の総合的な解釈を記述する。

「MIT の授業担当教員の指導技術の高さや学習者の意欲・集中力の高さの相乗効果で、息をつく暇もないほどスピーディーだが、一方でとても楽しい授業になっていた。学習者の能力の高さに加え、学習に対する努力は想像以上で、授業の密度は今まで見たことがないほどに濃かった。自分は英語力、日本語についての知識不足で、先生がするように学生の質問に即座に的確に答えることができなかった。経験を積めば教授技術を向上させる事ができるのだろうか、あるいはこれは先生の天性の才能なのかもしれないと考えた。」

#### 4. 3 研修の学びについての報告者の総合的解釈

ここでは、KUIS 生の学びについての報告者の総合的な解釈を述べる。

連想刺激では、研修事前準備、実際の研修（授業見学とヘルプデスクでの対応）に触れたが、KUIS生の語りは主として授業見学を通して得られた学びについてのものだった。分析から出てきたMIT生についての記述は、意欲・集中力・努力など学習態度に着目したものが主であった。また、教員については、才能・瞬発力・的確さなどの能力に着目したものであった。授業については、密度・スピーディー・楽しさなど全体の構成や雰囲気に関するものであった。また、教員から得た学びについては、「経験と教授能力は比例するのだろうか。自分も経験を積めばこのような授業、指導ができるのだろうか」という語りが見られ、KUIS生が、今後日本語教育に長期的に携わっていくことを検討したことも伺われた。このようなことから、KUIS生は日本語教育の現場に触れ、その難しさ、面白さを体感し、自らの職業としての可能性を意識するようになったとすることができるだろう。

一方、教授項目や、教員の学生に対する具体的な指示の方法や個別のタスク、アクティビティに関するものは出てこなかった。学びとして言語化されたものが、やや表層的で未分化なレベルに留まっているという印象を受けるのは、通常の教壇実習と違い、日本語教育についての知識や、授業を見学する際の着眼点を十分に身に付けていなかったからだと考えられる。

## 5. まとめ

研修に参加したKUIS生は、修了後に「参加してよかった」と評価している。今後、日本語教育について継続して学びたいとも述べており、参加者の将来の可能性を広げたという点においては、ある程度の意味を持つものだったと思われる。

一方で、約12時間（課題含まず）の事前研修では、授業見学の価値を一定以上に高めるための視点と、授業外の活動を自主的に行うための知識、技術を身に付けさせるのには十分ではなかったと考える。研修を今後も継続する場合は、日本語教員養成課程との連携



は必須である。また、本研修は日本語教育のサポートであり、MIT側からも指導は日本語で行ってほしいという旨のリクエストが来ていたが、KUIS生からは英語力が十分でなかったため、活動に支障が出たという反省も出された。初学者向けのサポートだということもあり、学習者と英語を媒介としてコミュニケーションをとるといった場面も避けて通れないものであるだろう。研修の意義を担保するためには、研修実施国や学習者の背景を考慮した準備が必要となる。

#### 【参考文献】

川口義一・横溝紳一郎（2005）.「成長する教師のための日本語教育ガイドブック（上）」，ひつじ書房

内藤哲雄（1993）.「個人別態度構造の分析」人文科学論集，信州大学人文学部，27，信州大学，47-69

PAC アシスト ver.20070801. 〈<http://wwwr.kanazawa-it.ac.jp/~tsuchida/lecture/pac-assist.htm>〉（2019年1月17日参照）

R2.4.1 〈<http://www.okada.jp.org/RWiki/>〉（2019年1月17日参照）

# 資料 1 授業観察記録フォーム

授業日                    月                    日  
授業者  
教科書                    第                    課

教師の発話（ティーチャートーク・指名・質問・説明などを含む）

良かったところ

自分ならこうするんじゃないかと思ったところ

教師の行動（立ち位置・動き・表情などのノンバーバル面）

良かったところ

自分ならこうするんじゃないかと思ったところ

教材の使い方

良かったところ

自分ならこうするんじゃないかと思ったところ

クラスルーム運営（教師と学習者／学習者同士のインターアクション・雰囲気作りなど）

良かったところ

自分ならこうするんじゃないかと思ったところ

教室活動の流れ・つながり

良かったところ

自分ならこうするんじゃないかと思ったところ

その他気づいたところ

よく分からなかったところ（疑問に思ったところ）

全体的感想／コメント

川口義一・横溝紳一郎（2005）「成長する教師のための日本語教育ガイドブック（上）」ひつじ書房から

## 資料2 ヘルプデスク活動記録フォーム

授業日時 月 日 時 分 ~ 時 分  
学生氏名

活動範囲（教科書課・トピック）

学生からの依頼内容・質問など

実施した活動・説明

活動に対する学生の反応

活動を実施した後の感想（上手くいったところ、難しかったところ）

次回、同様の活動をするとしたら気をつけたい・工夫したいこと

疑問・よく分からなかったところなど